



師走囊

師走のしるし



女信門人梅門撰



1960

那潜師走囊袋起之意趣



性首を解王代盛ありし時後撰集を編し其  
 中那潜神の歌とて入らば如歌日ありていさの  
 好まぬ風義なるし不中江の西北住人志那  
 孫三郎宗鑑ハチノミヤキといふ人  
 難髪ツウカミといふ山崎ヤマザキといふ名を宗鑑ムネカミと号しけり  
 是歌の存白なるもの内理亮ウチノリといひて連歌  
 不始フシを授けし能備ノホ大筑波オホツクハを二集出さし是を那潜の  
 権輿ケンウ成り其後伊勢山回イセノヤマノヘの神官  
 志木田守武徳シキミノモリタケノリの那潜十句を傳  
 はり是又那潜連歌の始とて是を連歌百韻レンカヒャクオンの式シキと  
 せり

とも詠詩の定まる法もなかりしを永貞徳連の  
式を少はゆりて詠詩の式を定む御筆七巻を若し  
世に立補はたむ草を化して世道の法式忠く密を  
今の世に或る風雅の道なきものには是れ少くは  
事ある一物にして上古の詠詩は優艶壯麗なり  
かりかりし実情を述べたるにたりしに貞享天和の  
以芭蕉老人京都に出く附るに附とて少くは  
骨氣を著しひく実情を家とてり時世を憂回し是非  
評定のごとく起るといへと終るに霜の正風解り  
け風をに流し事なりぬ今代の人へ余流を汲む

いへとも志すも公卿の句意ハ定むべき  
務の爲是る姿なりし計りし人稀といへて公卿の句意を  
急ぐしと公卿の門下とて人のあらんとて  
顧みく霜の句中に世人の通曉一かたはの  
海をなれりもつとて解の尚ほ我を  
志し一徳顯師在妻と号し一彼をり句也  
く公卿の意を記しり年の書

文二十一日日  
西戎の閑人 述之

湖水眺望

仍妻を近江の人と惜まむ哉 芭蕉

此の妻を近江の人と思ひて惜まむ根不  
いひあらしむるも類は湖水眺望とあれは武彦を  
出して近江の妻は州山ありての白心言ふの深まてち  
京都にありて妻をもむさうの人と候も惜しう今年ハ  
を以て省てを深の人候も惜むとの作也けり而も  
切事見れば大概ハ大まらしむる格のやうなる白中  
候も切事ありて教養人の心宛つらとほき略し

我衣は伏見の柳もやとよ

是西岸寺の院より射つての白也而伏見の柳もやとよ  
桃の衣をとりていふは有難き教化一衣の柳をもし得し  
あつれと

仍弱れ麦は慰まやとやう哉

是甲斐の白山家よりくの白也甲斐のむらり牧ら弱  
多し所謂甲斐の素弱なりと云然る是之よりくは仍弱  
是よりくは是れも時方なれは麦秋は立止所之麦の妻の

益人母ありて物も何れ 幸の書

是の透世の後れりといふは昔は母ありて故家もあ  
り候しはふらり益人母ありて事のおぼゆるは今世控人  
なりては益人母ありて物も何れは是れも世を控るる

かりしとの余情をさしり

「陽をさしり師直の海はかひつかり

けりかひつかりの白とくを言ひせのほれ言まの句く  
師直とくしり文子の入るまを考へ一世の人の世をたのむ  
あつたれとてかひつかりのくぬけ強ゆるの他は師直を眼

「道の邊に木槿を馬に喰まさるり

けり木槿を喰まさるりて午時の目も志をわらへるり  
くろくしりもの他は妙へ姑句面白深意照りぬきまの芳山の  
院山集ふしけりを載る路を道の木槿はるよんくはしりしり  
けり白の非も一向早の難くて識ゆるも備は芭蕉の

上戯弄を海へ悟さゆえ

「梅白——まは少や鶴を遊まはれ」

けり題上梅林とありけり梅の白く笑ふあり  
ありしり是を好む林和清と名なりし何れを鶴も  
有へまは若あつしり今も鶴のなはれまは少や鶴を  
遊まはれしと誑かす梅の白作し

「山路まて何やうのしすこれ草

けり山路まて何やうのしすこれ草  
定むらるりのなはれ少一草の言ひ山を言ふも旅の  
なめてゆきしり今も言ひあしり





いよわうのくにさる高き枝にそよ風のよき一葉を折さるまじき自ら

梅香の自の言語妙に

是山中の吹く物まじき藤りのおしよ物白の出るおしよ

梅香の自の言語妙に

暖屋の奥物ゆの——北の梅

遊子 伴舞あてとの世亭と有東枝の花始て一葉折ぬれ  
枝のおくれは折枝自物ありきさるぬえ暖屋の奥  
多とくありまは接枝まよとら即取寄し

梅の葉のぬりこれ宿のころけ

け白乙州の東武の月儀してせりおや入る折のけ

梅の葉のぬりこれ宿のころけ  
まゆりの宿の月をぬりてまゆりけなると一葉まよととの  
白のやまのまよぬれは白意の東武のぬ物まかりて西  
武の葉をぬり好士ののぬまよ海をぬり

梅の陰の陰の似るは折の葉に

是忠度の歌にこの下陰を高くせよとやあふひのま  
るまよとこのぬまよ心まよ折てのけ

梅の雪の雪待方上野をば折る

け白の雪の雪まよのまよと武待もまよとけき折るぬ  
目はいそれ折るぬまよ上野をば折るぬ



ともの白く子なきるの思を強くさすも白く

初ーくれ猿も小養をなけり

此句懐養子のせく伊賀越後りのひかりーとく  
時西のくれ猿れむすりて雲あなる神小養をほり  
あやしき時の何りさ海をひやしき一旬の海言とかけ  
神指の読ありしりく先軍のいつ馬もあひらあり

あらしくと目ははまぢくも秋の風

是秋の日に書あく西山は満ちるをづれりも  
おらねしむみ秋風のるみ入しはさ海をひやりー

今と屏の木のぬるらよみさるや

けりあらしをいんてく空を屏の木の古きまをさけ  
しり此古屏風は山に神を移りのかけ合悲傷は  
あ考ら五論も空を屏に冬を移りまをいんてく  
神もく神ははるまは屏の花を移りてて千尋の  
度あゆ離ーきあ神もく神くさありといふ

堀鯛の歯くらたも空ー空の柳

けり空の柳とーて雲をき神をいんてく堀鯛の歯  
くらたも神もく十論も神をのせくも羽は春は  
すんで神の心と神とあり

西つ五器の梅りぬちらんら布

類上野の也久中候のりてと有例の幕亦以て  
らふも花見も何由中候方にはあつて志のよき  
事からあつての事おもひて可なり大なる  
うらみもあつて候事候事候事候事候事候事  
力を早下一候事候事候事候事候事候事

用世の事候事候事候事候事候事

是の三聖人の圖に據りて日節の事と云ふ事  
は此の事候事候事候事候事候事候事  
多し候事候事候事候事候事候事

船の子に白鳥を別れ候事

は白留別と題をり我は白鳥のこゝろ甚張り候事  
そあつての事候事候事候事候事候事候事  
この事候事候事候事候事候事候事

古池や陸花は雪水乃音

は白鳥のこゝろ候事候事候事候事候事候事  
是事候事候事候事候事候事候事  
よ知候事候事候事候事候事候事

白鳥や思ひ候事候事候事候事候事

けり候事候事候事候事候事候事候事  
母候の法候事候事候事候事候事候事

白桑うら水花目に建まらぬ思ひのこゝろにほの網をさへ  
まゝとて親子の心をさへく秋言をの白し

何のよれをさへさへは白ひ針

是は伊勢は糸の白く被ぬりら何事のたりにさへ  
あゝおともしといふ秋言をさへさへ今も彼神附の國を  
こそといふ秋言をさへさへ今も彼神附の國を  
何のたれともさへ思ひぬるの白ひは増あは

あゝといふ秋言をさへさへは秋の風

是は盛右の絶れ白く一人の體をさへさへさへ  
巴らも秋言をさへさへさへさへさへさへさへ

秋言をさへさへさへさへさへさへ

三井の月

是は島に宿り地中の樹傍に寝て月下れ門に  
白の心をさへさへさへさへさへさへ  
門もあきさへさへさへさへさへさへ

胡蝶をさへさへさへさへさへさへ

け白芭蕉を相さへさへ一代を秋言をの白とさへさへ  
春は大概胡蝶と化すものなる其秋にさへさへさへ  
なう胡蝶も化する事もさへさへさへさへさへ  
け秋さへさへさへさへさへさへさへ

ちたつ所は花月の為にかしひるゝ助費なるも  
なく一白も取らぬもるる等々の人せざるも非ず  
しと

是真盛の復用を見て追悼の自之集巻裏より  
筆力の壯年を假せて討死と一真盛をも之秋の末  
あつると記し擧げて上りし人等も甲と書て信討死  
悼る言能くしるるなりて是れも物を破害せる皆  
けねむなり

一 戒徳破賣と袴を五りり

けり戒徳と何處に貨通の筆集りては真酒賣に  
余り破るゝかみの物なるも一時の自とるゝなり  
はなるゝ等々の破賣の袴を計りては面白  
くは福人の金もこれ似しつゝのぬ破賣のやも袴  
若きり物なりと真とてけり神入

一 葛袴と竹笠の本の尻分

けり軍人の着合を説くと類を閑人の袴と書  
はる中といふは絶妙に類なり

一 馬も出たるは侍者の且分

旅人も見るゝ場をけりけりるもあつたといふ物  
かきよのつゝおのをも眺るゝとあつたといふ物の  
かきよのつゝおのをも眺るゝとあつたといふ物の

旅人の言もさうにけし〜  
旅心深〜

「まきかすれぬ鳥もたつた山の物哉」

まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜

「櫻のよれぬ子かまらぬあうか」

まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜

「まきかすれぬ鳥もたつた山の物哉」

まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜

「まきかすれぬ鳥もたつた山の物哉」

まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜  
まきかすれぬ鳥の言もさうにけし〜

〔蓬草〕 昔の昔の 伊勢の初夜

是歳旦の白之伊勢の初夜は昔とされ元日なれば  
うつす成りし幸甚なる昔伊勢海を伊勢のる  
急なり 渠にたまりともすもやと元日伊勢の初夜  
ふれかたを

〔梅香〕 昔の昔の 一季長きなり

是一圓忘退悼の白心梅の香を詠一季の昔  
くものやうにひひとく人ひひとく昔の昔  
一季を詠されし昔梅は人ひひとく昔の昔  
を詠らるるの昔と詠く心は昔の昔

〔か〕 昔の昔の 柳の昔

是柳の枝れつうく枝の昔の昔の昔の昔の昔  
句の心は細き枝の本は昔の昔の昔の昔の昔  
彼秦の昔皇れ雨宿りとも昔の昔の昔の昔の昔  
下り昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔  
八の九の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔

け句の柳の昔は風は昔の昔の昔の昔の昔の昔  
空より雨の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔

〔雪〕 昔の昔の 中の昔の昔の昔の昔の昔

け句の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔の昔

例み又維子の啼あり是は空雀の相の白より啼  
かき真しむる也

「是れ由や」梅の葉付しを福の編

是る鳥の言より所を以て白也其鳥のより積り  
まかりとより編し其れ梅の葉を付して居るも  
け梅の葉と入るもてけ梅の葉は人にも怪しき  
神自然と取れしより奇女の化意也  
梅の葉と梅の  
「是れ柳の泥もてけし干か

是れ自ら言の白くけ梅の葉は人の柳の形を替へ紅顔  
艶麗のそ人びすもて梅もてけ梅の葉は梅の葉に

彼女を楊柳もてけ多めなる梅の葉は梅の葉に

「是れ梅も」梅の葉付しを福の編

是れ梅の葉付しを福の編の白く我れ梅の葉にあり  
一より少りし梅の葉は梅の葉にあり  
歎する白く梅の葉は梅の葉にあり

「南飯より」梅の葉付しを福の編

是れ梅の白く梅の葉付しを福の編の白く梅の葉にあり  
梅の葉は梅の葉にあり梅の葉は梅の葉にあり  
梅の葉は梅の葉にあり梅の葉は梅の葉にあり  
梅の葉は梅の葉にあり梅の葉は梅の葉にあり

墳に葦子の影を射し入るるのよはにまはるる  
あまのよはにまはるる

蝶の飛ぶの目影中

是中中の目影に蝶の飛揚を影を射して我を射す  
り向への挨拶に我山野に吹りて胡蝶の余響を  
若くむくくの生涯なるふ華に人の情を射して  
夢中の目影に蝶の影を射す如く我を射す  
起るく我友とを射す如く胡蝶

けりし莊周の夢に胡蝶とありて故事を今とて  
生涯の影を射すの如く我友とを射す如く

起るくは影を射すを射す如く我を射す  
旅りたる影を射す如く我を射す如く

二眼止るの角

幸を射す故人の影を射す如く我を射す  
おもしろくは影を射す如く我を射す如く  
生ずるくは影を射す如く我を射す如く  
二眼止るおもしろくは影を射す如く我を射す如く  
おもしろくは影を射す如く我を射す如く

題に射すは影を射す如く我を射す如く  
一白の心は本影の影を射す如く我を射す如く



得て勅書一紙を一天に施す所の書を生かす事  
多しと云ふ信濃の書に云ふ事多しと云ふ

「雀子と雀啼かり月氣北葉」

是は近し未熟なるもの一穂谷の白と云ふなり葉  
雀子なれ共頻て花梅せ所自在をば下し我氣也  
其啼者今い大概同一れ共終由氣也て終はと

「大比校や——を引籠——」

け白山と云ふの如くは所南意神物入——を引籠ハ  
彼一休和尚殿山北傳云何と云ふと云ふて讀メある事  
多てぬと云ふれ——頻て山上より坂中を紙を籠

大書も持て在り引下りて下り是あさきの新書有  
——の字も長くもてよめおたの事なり和事なり  
かたれ幸一休物語に云ふなり西よりあるなる事取合  
——を引籠——の如し

「雀子と雀啼す事か知らぬ」

是は山邊の道の田舎の白く我の世隔てては  
多しと云ふれは四海に多くも今も——は西の村ありは  
ふりけは西の村ありは——は西の村ありは  
後れは西の村ありは——は西の村ありは  
人の目を時え道遠院及びて宗經をば是なり

杜若成りしやし宝鑑を池の橋よりり母容の瘦妻へ  
そらるを評具より宝鑑を海をなれに鐵忠か知つらること無縁  
宝鑑の橋より母成りしはワキ可はとて言へんとすれと  
妻の他ありと上りや鐵忠よりく付ゆる白句之是此況  
も感へて宝鑑を杜若母成りし海あり杜若とや  
あられれりやいなり

・ 朝あさら正月の梅の成るなり

是時多きをやてく今迄起るを責て汝何れ母  
若あかりて物言の出りらるるは是れ始りしは  
母之孝正月の梅の初成るなり何とて起りせば  
やしとらめく責へらる白句

・ 礎いしおして我よりやとてよ坊の妻

芳世の契或坊より魚を借ると有白の心我も世を  
いよ解たれは心人母かり事なし何とて無めあり  
まへにはし書も何とて事礎おとめあり我も  
やうへとの白句

・ 冬ふゆ杜若千鳥も音なり此況

けり葉名甲齒ちめくともありの心は院に言すく  
たぐへて志をも言候ありりハ音甲山勢を撰ん  
まをれたりれもあめ杜若千鳥も音なり観へて責す也

よの白く一白のはまき人かうりて巧也

志たあはく枯て餅賞やうり引

勢田の社破壊——るふ糸訪——これ白く蓬をたし  
り、い大概意こふあし生衣る物ちるにそれるあ  
あし枯果くやとあしおもあし所跡ちの肌を助  
く原もこる正餅賞造立やすしひらき海あのみ深  
らり所思ひやう——白のはまき人か

一白のはまき人か

是凡雑の席かきくはまきあし上り北間あく心と海寛  
優艶子あはく——よの白く改び——あし生衣る物ちるにそれるあ

いふの——たむさうれを目元の席かき有て威儀堂く——  
——ての風雑う——はまきあし上り北間あく心と海寛  
てあはく甲あのみあし上り北間あく心と海寛

一白のはまき人か

是まきを情む白くまき——被詩十月落身啼れあは  
あのみあはくまきあし上り北間あく心と海寛  
情むてあのみあはくまきあし上り北間あく心と海寛  
情むてあのみあはくまきあし上り北間あく心と海寛

情むてあのみあはく

是那須野の原あはくまきあし上り北間あく心と海寛

軍出きのつとくあつてくちまのつとく、修昔二浦上總乃  
あつたつたつたのつたつたのつたつたを合せて我もまじりて  
郭のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

郭のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

是杜鶴のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
人且挨拶之のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
かゝるつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

京のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

京のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
一入るつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

京のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

是のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
あつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
あつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

灌佛のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

是のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
白のつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
あつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
雅の中つたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた  
あつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

竹の子や 雅な時の陰にすまひ

け句泊船集あに傳りて陰のすまひとあり秋傳集  
 あんすらびと有句のやい源氏物語の巻子集の上  
 雅き竹雜作りあふも陰さあふも源氏の志と  
 つらういさうなる縮ませがけはあふも何の  
 本とくきく〜 雅き母の陰のすまひみられた竹  
 け子の生まると〜いさう〜成人〜あふ〜  
 竹の子の  
 是處路を隔る人の方の挨拶之き方今母  
 なる〜いさうのあふ白く〜  
 竹の子

竹の子〜金か目かか〜夏流〜のさ  
 程を隔るら及び〜  
 竹の子のあふ〜

竹の子のあふ〜

け句のあふ〜  
 竹の子のあふ〜  
 竹の子のあふ〜  
 竹の子のあふ〜  
 竹の子のあふ〜

竹の子のあふ〜

竹の子のあふ〜  
 竹の子のあふ〜  
 竹の子のあふ〜  
 竹の子のあふ〜  
 竹の子のあふ〜

きしんが或はうきくのかげに能くを者らに流し  
身も一母の白くさくさく已く女もたしく一母の  
おもしろく光を照らす心も別を宿す  
風薫る花散る襟も結るに  
けしん丈山の像に讃と有る女の像を風薫る花散る  
志も威儀容態もあつらぬを相織に襟も結るに  
けしん結る白くさくさく

お月夜もや色あまらぬ一葉の露

落柿舎と題はありきくは神の自是者の色紙あは  
る一葉の露もあまらぬ一葉の露とあ月あつたの葉

お入る志も色紙のまらけ一葉の露はとわらぬ

我も似も二つあつた一葉の露

門人の鏡もきりけと有る葉の二つあつた心合  
さるものえそれ我もき方ぬ似それとあつた葉を  
歎するの白く

物も似も二つあつた一葉の露

けしん葉の物も似も二つあつたの如くさるる白く  
白くさるる葉も二つあつたの如くさるる白く  
多心とあまらぬ心探を歎するの白く

お月夜も一葉の露の感る形

是人并たとして風雅も有てき心止しも考に換移え  
氏い苑の以別室も一友に黄蛭のものをれハ苑実  
お兼り人の換移え

柳曾柳行存の源一志素氏

是譲りの物出立斗柳より一らやうを新幼志素白  
おみくしは花の白く出立の時北白とていひし

日の道や夢かこくくお目あ

夢ハ日向夢とて一色ハ日車とよむ日廿連ハ西の道  
お目あのかたれハ日の何時とていひし日のあらは  
夢かこくくといふ

お目あを集く子一窓下川

け集めておくと云ふ一色言ハ水増りて川が漲り  
流るるお目あをいひし

お目あや蚕や川に子蚕の楳

けりさるるれ類をれをよれ蚕ゆい外ハ世の事な  
され在蚕下りぬ子蚕楳出でて蚕の葉をぬらぬえ  
なるとは是は何ゆえを蚕れ事と思ひぬかぬえと  
いつ高き蚕楳やハ世にり蚕れかあるとていひし

お目あを女隠れぬものハ源田の楳

けりさるるを是の道なれハ人の性もも隠るるを

なうあもあまかられて足さきむに唯那田の橋中にかゝる  
あぢく酔りぬらふと也橋の眺を羨し海自見

〔多分月日不詳〕

けりいふあかきを面白し連縁の人をさ世々時し  
搦て若しこの余りけさうかの中かありて涼むもの  
有り世のまづ後を歎くまをさ世々時し面白し

〔橋〕

けりいふ眼を眺しこの白もさうし橋結かこめ顔  
髪をたさきてあさうとえ橋結といふそれを眺む言  
たれをたししあまのあまもさうし

〔あや見草あや見草の結〕

是結りの白のあや見草あや見草あや見草と草鞋の  
結もさうし

〔田〕

けりあまを眺む白のあや見草あや見草の女を  
田一枚を眺てさうし

〔風流のけり〕

真乃白川の雲を越すと有鄙の果るれを眺む  
凡流の始るんと也或人の曰白川の雲を越て初







入つてなまぢい夢をさるゝとてこの心も有る

月をさるゝとて物さるゝとてはなほ愛

顯須磨とあり縁のうさ何事と心もさるゝとてはなほ  
あぢい月のせらるゝをえては月も人満ちと欠るゝ有  
るよと説いてはしるゝの申へる事と有る  
してはなほあぢい月とてはなほ

松子よかゝる月や楠のそと

止成り像も隣の言也彼楠の討死を人進も子正行を楠  
井のさるゝとてはなほあぢい月とてはなほ  
あゝと石と化する楠のそと有るゝとてはなほ

面やあつやうと想ひは楠舟哉

けり楠舟の徳は何れもなきをみ付に空も  
報ひも後の世も忘れ果てぬやといふとみ  
楠舟と竹片舞火の消へぬこと想ひれと云ふ  
何れも一白をばさるゝとてはなほあぢい月とてはなほ  
はなほあぢい月とてはなほ

面やあつやうと想ひは楠舟哉

けり楠舟の徳は何れもなきをみ付に空も  
報ひも後の世も忘れ果てぬやといふとみ  
楠舟と竹片舞火の消へぬこと想ひれと云ふ  
何れも一白をばさるゝとてはなほあぢい月とてはなほ

面やあつやうと想ひは楠舟哉

片の信成りもあはれなるも  
かのあまも一はあまのまはらま  
あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも  
あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも  
あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも  
あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも  
あはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるも

七ノの海をたれい合歡のよれを我もとありーとく  
願ふももゆまーを合歡のよれをあり

「海や佐波子接と天の河

是七ノ且海をありーる句と出雲藩より佐波の舟  
舟南やとてあれ七ノの海をたれぬあるもの佐波の舟接  
きよく二句の仕立巧なり

「新くゆや直瀬おらば門の垣

けり題は閑閑とあり句の心は直瀬おらば門の  
垣たれぬ新くゆは直瀬と是直瀬の門の垣  
の修んぬるの垣たれぬ能たぬと

「海東ありれさ回一秋は風

けり言は来子りう方直とありとと直句意がれ  
「はらうひもまゝい秋の秋

横控の月をみるる秋一てはらうひもまゝ  
まゝい秋の秋

「既<sup>イハレ</sup>もや海老煮やの煮た圍

是は魏志に南海中におあり日暮く羊れ腸を煮  
てはらうの熱もれい別目をこらるるをとりてはら  
の月にはらうの海を煮はらうの煮た圍と羊の腸を  
海老煮かつての他と









馬方の多し一 時西北大井川

け自時毎のあはるしは神の言士なるもの類ハを  
まゝと大井川とをて言士は射とく面白く

カヤ斗人オ年ヲ此初時物

初時物の七ひしは神をあらはし(心)は射(は)さる  
斗ニ世の人オ年(心)は射(は)さる(心)は射(は)さる

富信三して志をきけし一 時物歌

時物を思ひは信をきけし 我志をなせしをきけし  
時物思ひしを信をきけし

斗ニ世の人オ年ヲ此初時物

斗ニ世の人オ年ヲ此初時物  
斗ニ世の人オ年ヲ此初時物

斗ニ世の人オ年ヲ此初時物

斗ニ世の人オ年ヲ此初時物  
斗ニ世の人オ年ヲ此初時物

斗ニ世の人オ年ヲ此初時物

斗ニ世の人オ年ヲ此初時物  
斗ニ世の人オ年ヲ此初時物

斗ニ世の人オ年ヲ此初時物

斗ニ世の人オ年ヲ此初時物  
斗ニ世の人オ年ヲ此初時物

舞臺の迂言の句は迂言と云はれし舞臺の  
とらぬし一知をひかへし

いざはしつゝと書らん其時つあは

ける中あまの人をたふしむの句をとも書ん

時ふあまといふ所相を面白くいふ事ふ笑ふ言は

書の申す兔は皮ち替つくれ

山中より子たのむひくとも有るの書きし

ゆゑ遊了可考又或人の曰書ゆ書事人といひ

ゆゑ後子越後屋村白知替つくれと子た下知

句より作らん

あまの書り又らり候せけし

是れ日比粒山人の挨拶と云ふ句は

ゆゑとらぬりぬれいふらりて粒山人の句を

先づ梅を心け冬も書

暫く強きあまの人を有候難波の二由天王

を王仁ら難波は日吟也この記を玉書と云ふ

梅を心けし冬も書しと云ふ世を流し句を

難波は梅や田舎の書も冬も

是れ其方を早しと云ふ句は如くふれを

難波は梅や田舎の書も冬も

おめ溝や酒のやうな酒五本

是日蓮上人の御書に新麦一斗、新三本、酒の根、酒  
み、井、酒、おめ、は、道、善、経、と、回、向、波、中、有、酒、を、取、て、之

酒を為すや小樽ちりり白乃跡

け、白、空、氣、を、此、樽、さ、ひ、と、酒、樽、を、云、小、樽、ち、り、り、を、此、井  
向、の、御、り、一、を、取、の、け、と、白、跡、ま、あ、く、と、御、り、て、倦、る  
もの、之、を、此、樽、の、け、一、樽、を、取、れ、お、も、と、ら、し、は、と、は、一、白、碑  
と、ら、る、と、は、此、樽、の、れ、在、る、御、の、御、書、よ、り、て、め、り、と

三本の山とありておのをさす

此、を、控、一、か、み、お、り、一、は、お、の、を、さ、す、の、な、ま、い、か、い、と

あ、い、ぬ、ま、い、か、い、の、山、か、し、嵐、吹、く、本、の、葉、は、あ、ら、い、と、ら、  
他、

おのの後、お子、咲、う、家、大、樽、式

古、知、代、を、お、ひ、こ、と、者、む、一、冊、を、取、ら、る、御、功、有、て  
用、ひ、ら、れ、一、冊、を、控、ら、れ、一、冊、を、取、の、御、用、わ、り、し、大、樽  
あ、ら、い、り、お、成、て、お、お、子、を、控、ら、れ、て、其、御、り、咲、い、と、ら、  
是、お、子、を、今、御、め、一、冊、を、取、ら、る、御、用、有、て

難、吹、お、御、書、御、書、軒、に、お、敷、引

心、ハ、深、遠、行、お、大、結、ハ、嘈、々、と、一、  
つ、身、を、お、り、て、倦、る、御、り、新、御、書、の、御、書、を、御、書  
と、ら、ら、る、御、り、の、御、書、難、吹、と、ら、る、御、り、の、御、書、也

あゝ何れもあやむくぬ河豚汁

是芭蕉翁生涯を花犯を著すと歎いて一庵此芭蕉  
をもよほぬぬ之傳也曰は自きたるはあふくといけと  
りよる能けて上又之享至うゆて洛の信使らあふく枝  
川からしを伝はせを誤りあはれとあふくの詞をゆて  
一るを成能ちてきといふは實に梅の竹任地心よ持正と  
あふくけの危知りもあふくもあふれを控け心よて大平  
を終るは何事か有まこといふをあら何よあふくとあふ  
く一之能けてあふく入くはあふく心を悟るべし  
あふく自くはあふくはあふくはあふく

けりい雲の雲の雲一をさへりて雲は雲はたふを雲は自  
招を自くとはあふくはあふくはあふくはあふくはあふく

甘藷汁菓の酒をさくらけの雲

是の恨むくはあふくの核はあふくはあふくはあふくはあふく  
うくはあふくはあふくはあふくはあふくはあふくはあふく  
あふくはあふくはあふくはあふくはあふくはあふくはあふく

けり防川首字と有風雅を笑及ひてま人をあふく  
まあふくはあふくはあふくはあふくはあふくはあふくはあふく

まあふくはあふくはあふくはあふくはあふくはあふくはあふく

詞も且大通房道長士の芳名をさくらん人半をあふく

一 其妙あるの義し 一 其四つありき 一 ありは白枯  
木と一 しての香あり 一 枯木の得りたるが 一 其入其容に  
あられ其杖の人をたれん 一 其染たるのや 一 ありと一 ありと  
さるるなりん

一人其家を賞はさく我の幸也

初ち其乙州の物 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
あちし 一 賞調へて 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
何とぞ 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
一 其入と有人の世れあり 一 其し

信つぬ其れ也 一 其入と有人の世れあり

是も巨魁かかるとして 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
を 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
巨魁の心あり 一 其入と有人の世れあり 一 其し

乾羅も空也 一 其入と有人の世れあり

是も空の中あり 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
空也の空日 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
如くも 一 其入と有人の世れあり 一 其し

月日向師在り 一 其入と有人の世れあり

け白の心を 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
月日向師在り 一 其入と有人の世れあり 一 其し  
月日向師在り 一 其入と有人の世れあり 一 其し

是をとりて師をたすむるの事なり。然るに、  
子似たりとは、  
是をとりて師をたすむるの事なり。然るに、  
子似たりとは、

芭蕉翁一代の句は泊船集句笈等これ法書より  
載といへども、  
芭蕉翁一代の句は泊船集句笈等これ法書より  
載といへども、

井懐を初は、  
井懐を初は、

附録

思山抄

連歌部傳正季子一の裔をすむる禁忌此  
事之是を調依の句より古人の句をまゝ是の  
各式有され其古人の事とく今迄の上ふくすも亦  
あり是ハ其往來ハ其時の宜しかり止るをゆすて  
る之中は大阪にて大園秀吉公此由子秀頼の事ある  
時安産成就此祈禱不為此本の連歌師を百納り  
百納無りしより其時の家通紹巴乃各句也

大般若らるる其れ祈禱の事

一ニハ過くらんの叙とく 昌化

けり他意慈言わく神の感應も有るらん

百納満より其君誕生有りされ其けり不季は  
不吉の連歌なる也中傳りる事して慶長元和の後  
豊氏の社稷滅亡して御成も生害ましく其  
是紹巴矢策之とヤリ其式人の曰是等々の事全知  
りてたせらるる皆是天下億兆の人其上を  
えりり理世安民の志あり執りたり其れ連歌あり  
其旨趣を極海秘の中をれハ口弁仕給へ云々  
一の智日向守光秀信長公を我りまらぶ其是岩  
山子也連歌の百納あり法橋紹巴とて傳ひる天下  
革命此連歌なるハ惡敵降伏の法をわけての句他

有願起事常不を習ひもろく反逆の心中に秘して言ふ  
事され、細巴もよの常たると思ひたりと、かやを時先事  
卷百四

時を今あえり下知内さし引

一白の仕立、願白りれ在降伏の法なり一是木の白止  
又月を教事とすれば習ひあり先事是を知り  
して終事功を金ふす事あり一又天正の比に織田  
信長公武田出郎勝頼を征討し一其時連歌卷百小

松風子けりこひひな起且引

百顔成物の後、師時中折立武田勝を退退け一戦

大に勝利をたあひ終武田滅亡せらる是は  
白の白法字法各式せられし一合戦いさし始り  
さるは勝利の勝一取終り治承平天下に習道  
なる反ふ法、暫く暇乏

一那借、連歌新式の法を換置すりものなきは  
昔より連歌也云觸る白けや事法は是をもちりて  
仕立し一是那借の肝要之中古に家通時の毎事案  
して季なり一或は切事なり一の案白なき云出り  
事あり終事をも道徳への達人をいせ人へ云  
沃日なる社の事、必揃へて有事之世に人へ言て是を



都<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>一<sup>て</sup>彼<sup>の</sup>達<sup>の</sup>人<sup>の</sup>の<sup>の</sup>抽<sup>き</sup>出<sup>し</sup>を<sup>を</sup>す<sup>ら</sup>ら<sup>ぬ</sup>必<sup>ず</sup>一<sup>の</sup>空<sup>に</sup>  
落<sup>ち</sup>入<sup>り</sup>て<sup>の</sup>鴉<sup>の</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ね</sup>に<sup>の</sup>馬<sup>の</sup>の<sup>の</sup>水<sup>を</sup>吞<sup>み</sup>と<sup>り</sup>大<sup>き</sup>に<sup>の</sup>駒<sup>を</sup>  
か<sup>く</sup>事<sup>を</sup>え<sup>ま</sup>と<sup>る</sup>古<sup>く</sup>の<sup>の</sup>捨<sup>り</sup>や<sup>れ</sup>る<sup>の</sup>法<sup>あり</sup>と<sup>も</sup>む<sup>さ</sup>し<sup>と</sup>  
さ<sup>や</sup>う<sup>の</sup>ま<sup>に</sup>似<sup>す</sup>る<sup>に</sup>は<sup>是</sup>身<sup>の</sup>一<sup>の</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>を</sup>今<sup>の</sup>世<sup>に</sup>能<sup>く</sup>  
先<sup>輩</sup>も<sup>か</sup>く<sup>者</sup>一<sup>な</sup>とい<sup>ふ</sup>所<sup>に</sup>無<sup>法</sup>人<sup>あり</sup>是<sup>の</sup>亦<sup>に</sup>此<sup>の</sup>道<sup>の</sup>  
身<sup>の</sup>後<sup>身</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ぬ</sup>愚<sup>昧</sup>の<sup>の</sup>輩<sup>を</sup>と<sup>も</sup>今<sup>も</sup>芭<sup>蕉</sup>の<sup>の</sup>白<sup>く</sup>  
か<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>杖<sup>つ</sup>き<sup>板</sup>を<sup>を</sup>る<sup>事</sup>外<sup>に</sup>  
是<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>い<sup>と</sup>よ<sup>む</sup>友<sup>の</sup>古<sup>く</sup>来<sup>り</sup>り<sup>り</sup>香<sup>り</sup>は<sup>香</sup>白<sup>く</sup>  
と<sup>云</sup>う<sup>ら</sup>い<sup>せ</sup>り<sup>け</sup>り<sup>い</sup>

梶<sup>は</sup>楯<sup>は</sup>杖<sup>は</sup>突<sup>は</sup>坂<sup>を</sup>を<sup>る</sup>爲<sup>す</sup>業<sup>外</sup>

是<sup>を</sup>爲<sup>す</sup>業<sup>の</sup>香<sup>り</sup>を<sup>を</sup>る<sup>事</sup>と<sup>云</sup>は<sup>れ</sup>る<sup>事</sup>又<sup>に</sup>  
あ<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>い<sup>と</sup>よ<sup>む</sup>を<sup>を</sup>誰<sup>の</sup>傍<sup>に</sup>を<sup>る</sup>心<sup>に</sup>  
け<sup>り</sup>の<sup>の</sup>物<sup>は</sup>た<sup>た</sup>と<sup>云</sup>う<sup>ら</sup>い<sup>せ</sup>り<sup>け</sup>り<sup>い</sup>  
麻<sup>の</sup>の<sup>の</sup>掉<sup>し</sup>れ<sup>る</sup>の<sup>の</sup>端<sup>を</sup>其<sup>の</sup>心<sup>に</sup>  
白<sup>の</sup>の<sup>の</sup>心<sup>に</sup>の<sup>の</sup>麻<sup>の</sup>の<sup>の</sup>竿<sup>の</sup>の<sup>の</sup>端<sup>を</sup>は<sup>は</sup>る<sup>事</sup>は<sup>誰</sup>を<sup>を</sup>傍<sup>に</sup>希<sup>に</sup>  
そ<sup>と</sup>松<sup>の</sup>の<sup>の</sup>端<sup>を</sup>云<sup>は</sup>け<sup>て</sup>ま<sup>の</sup>と<sup>云</sup>う<sup>ら</sup>い<sup>せ</sup>り<sup>け</sup>り<sup>い</sup>意<sup>の</sup>心<sup>に</sup>は<sup>は</sup>り<sup>て</sup>  
か<sup>ら</sup>心<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>他<sup>の</sup>ま<sup>り</sup>是<sup>を</sup>考<sup>へ</sup>て<sup>む</sup>さ<sup>し</sup>と<sup>云</sup>う<sup>ら</sup>い<sup>せ</sup>り<sup>け</sup>り<sup>い</sup>  
白<sup>と</sup>け<sup>り</sup>付<sup>る</sup>事<sup>は</sup>甚<sup>だ</sup>卒<sup>忽</sup>の<sup>の</sup>即<sup>ち</sup>か<sup>ら</sup>は<sup>れ</sup>る<sup>事</sup>も  
上<sup>下</sup>の<sup>の</sup>宗<sup>通</sup>と<sup>も</sup>成<sup>る</sup>事<sup>は</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>の<sup>の</sup>故<sup>を</sup>く<sup>て</sup>香<sup>り</sup>  
る<sup>事</sup>の<sup>の</sup>香<sup>り</sup>は<sup>は</sup>た<sup>た</sup>う<sup>ら</sup>い<sup>せ</sup>り<sup>け</sup>り<sup>い</sup>又

前々皆杖女ありて後の暮業

是より其の季より一の句に古人の拙丹も暮業よりハ  
季より入ればけ初也古弼の海りて多々念をいふむ  
あり 智丹一旬念祈を天念れ海にけ友丹初也其後  
了して季の幽丹はまゝありて是よりけ初歌丹ハ内く  
る事之伴踏曲作不流生の海り初のありけ初丹  
為のむをたてき後述

四れつこと志あてわつは季の内

是よりいく日もありしと思ふ

け歌の内よりあるは花ありし一は初也より後れり

那譜も是より自一されき初也の人た多ふを季より

あり

一は才女那士持初の那譜丹けこ一の名取とも也  
名付て百勢初おは初丹名取たしすもその名也又  
那譜の初感人風雅破了のそ法也是は中比也  
世より庸られさ所ありては那譜初也一は欠由立南也  
まゝなり一那式ハなつて業人の初なる事ハ何れハ何れハ  
音格の記を設けては其書也やう胡广使唱やう毎也  
愚昧をくしは此道の高通ともひられまゝとおもひ  
那譜丹也式とらふもの有と巧出し連歌の應安公の  
旧式を西く換意し是を那譜の在式ありたんと

行國金れこと一知輩も相傳する事阿の連歌  
建治の式めい初おの面を十句と一て多おを西  
作る多をいともは是れめいあてな式めい多おを面  
許古よと南流も若くはとお傳するを真と  
心持むこと一知連歌も每反出は年之芳山と曉山  
集ふも大概論一て連歌めい新吉の二式めい新式  
對一な式よと多一知連歌の意あは新式より定よ由  
揚るれはな式よと新式よと云へき物更なる一  
是歌目そ何のよめいもよ真徳立南宗固傳れ  
みれんもいぬも巧也一是と連歌のな式之述

一向表すこと一知一割の詞を破すも守者此連歌不  
是をなるは破法の罪科甚きものなり一西  
若おを出さば一てけい難きものなり一彼  
の流業計人な知も集りて已う受よる事と執  
りて一努力天下一統の神人の中へ出て正義の  
始りて今も是も一正法の連歌も如けの源惑合  
出合も時ハ証を唱りて是を奏勸を打て彼を  
たて一是此道への純忠節義也  
一連歌連歌の花の匂ハ揚りて揚りてと  
志りもそ中解を知人なり一私目詩も絶と他多時ハ



名跡のうらみなき花を——かきり句敷ぬはるる花  
なれい懈遊の傍を立てけ取を構えく深されくし  
是十歳一時の愛創といふものめて宗道は縁縁愛  
きいすりな記を忘——勢く是未此愛創を格とく  
尋常の人乃すまきまみハ非ざる

一 深川より三羽の白鳥を雲を月を月ひらりるも是金  
宵闇月ぬハ何らゆとまぬ月道の月有て陰曾又ハ  
矣名おも難成取不盡の奇能あり抗を与はる者  
とたの事あるま

一 翠白の智と云ふ一那語一毫の大業といふ能を記せ

して白を能ハ一線——き語ハ尻を造りぬ多といふ  
しく——まききりり何の益もなきとて愛想両乞  
祈禱をよに祈文の得て盡きま

一 祝言の祭句に心切の句甚忘と云ふ七文の續きり  
縁徳亦ハ五音連音を月ゆハ定ての事一切字ハ輕  
是又智ひ事と忘と云いハ句論耳少三切字用控す  
へ——けあり大方とる

一 愛想の句季多——切字あり——なとわらぬ肥ハ季切字  
を八句——愛想下の句句わらぬ細ハ古句を——て面を  
九句と——却合百一白半是又季三大概愛想片



八つものうちまで月一ツ又花も一折一本といふ大抵花  
後一ツつ綴りするまゝなれにけしつゝ月と花  
二つありて二番とりは後ろく自由なけしけ花  
の句あれはむの光をかり用て月を離する事連歌  
は恒式となれり然ともうゝに花を記す月と花  
へき事句備へ連歌の式を換字とす中  
みく連歌止月の句はなきを恒式とす古人も多  
くこれ月綴りれり今とも急務のうゝに花をく  
月の句とくゝるある中古以来の名  
多しひ集の折に花を面するもけしけ花をく

一古哲の仕かへ止遠へそのを此道の二通

一揚も花へ付へけしけ花も揚句附くめはるを分る習  
ひとす事へ揚も花と附へる事句揚も花もめ  
揚もつゝ連歌の花は揚も花ありさるゝ花は揚も  
附へる花はめはるゝめやう止句花をす事  
一連歌の道さへおちつゝも知事おひの切字連歌も  
はるれぬ事なきくいひ止る事ありありの目

山里ハツコト止月」の事

けるは村香吟の句めしたるこの、傳文とす  
あつちの首を道なきつゝ連歌もはるゝ一花も







私目けるかくむつしく理あま及びは是の心を結を  
切の仕まゝ一句の心の月由以筆の松風の春すを  
うしく空を谷の水あてまゝうけ松風此下は  
うしく空を谷の水あてまゝうけ松風此下は  
略しつゝあ切にあて想して心切の句の皆は仕まゝを  
あまの句は

切の水あて返り筆も相抜る

是れを筆をかえり時の句とん返り筆もあゝぬと  
云詞のまゝを思へて返り筆あけ筆と断つての  
句と

一河集之修切の句也

花の細柳の枝をと切り風

注目又文章へ一つの物を行上てあれはかくも  
うしは花の細柳の枝をと切りてまゝとくも  
この下又文章の句の縁はす切りて云流しつゝ返り  
時は風の吹まゝ花の細柳の枝をと切りて  
不審しつゝま不審を返りつゝ下は略す 又私目  
けるまかくもくくく理りるま及びは詞をかか  
一句の心の吹まゝ花の細柳の枝をと切りて  
解らんと時は風の吹まゝ花の細柳の枝をと切

字のトクより云々付る友切字と云々付て一自  
解體一注其の是をかくて幸正しくくことなる  
一因集三區切其似通ひらる自切ぬ自あり

向雨ハ字のやとりも勝の女

神の事洗ひて星北云乃川

注目自雨の向又之字より七文字の心懸一又七文字の  
末のこの字も叶りぬ之次神北星と云五文字と下れ  
五文字も叶りぬ又是も七文字末の此の字もより一  
くしぬ能く味少一と云く私目是もより六字注ひ  
たりも自の心を解はさる是先自雨の自ハ

向海ハ男也神也者も勝の本也

向ハ自海の日也我身ハ云及りは神も者も勝盡  
より出らるるぬれらるとはけり中其也又字ニハ可れ其  
中の中も切字と云はるは是を又文字より七文字  
と云はるは神の事北自ハ

神の事洗ひて星<sup>敬</sup>の天の川

けりを洗ひて星と云はるは切之は一ハ等者ハ現  
在の一も字也切字も其下其の之字を付らる人  
唯初とありて切字と云はるは注目ハ、字也一可ぬ  
ハ向ハ其也

一回集大也一借文の則止

あなとうと妻の自みく玉は鴉

是あなとうと玉は鴉と出りて切るゝ玉は鴉の心は  
何んはあなとうと玉は鴉と出りて切るゝ玉は鴉の心は  
鴉と玉は鴉と出りて切るゝ玉は鴉の心は  
鴉と玉は鴉と出りて切るゝ玉は鴉の心は

あらし地の横織乱る冬は空

是乱るゝとつた一字の海を鴉と玉は鴉

一回集多糸旅葉切の悦白目

非かた目よりて久一地おの雪

注目け白なるとる着て切字と尺の白なるとる着て  
久一と向よりて切るゝとる着て切字と尺の白なるとる着て  
感情の悦云りて尺の白なるとる着て切字と尺の白なるとる着て  
多糸の悦云りて尺の白なるとる着て切字と尺の白なるとる着て  
非かた目よりて久一地おの雪とる着て切字と尺の白なるとる着て  
すし時いけは本の指目書のとる着て切字と尺の白なるとる着て  
一回の中目同春何りて感情の心甚深一是散ひの  
をりて一回を五立一白はと

一回集多糸旅葉をこめらる心切の悦白目

社風も種も出る秋を秋の春

注目是世の事と云ふと云ふの如くしてそれハ  
あらばもみえと云ふと云ふ所切と云ふ

「魔の音」といふは意の秋也

注目是はあのみと似通ひて心若くも亦能く切  
らばと云ふは亦はを處して云ふと云ふ

私云右二の注実を照らすは大方は姑の白いを  
後の白い大也と云ふは二の切字は内也とめて  
丹原はさぬは之れを人の為注は略と考へて  
一注借新式は切字と云ふあり

「切」といふは切字の音

けり白の切字と云ふは是切と云ふは是切と云ふ  
は切字といふの中なるは去中なる麻の音  
いねハ下切

一和歌は切下切の切といふは大概は切せてね  
へぬれよとの類もく下切の字を添へてある  
をいふといふは風と云ふは切られたるもの類は切下  
切は早語俗語を指すものなるよりけり此の  
弁正振くの切ありて下切となる事と云ふは大方  
をこそとの切はよる等と云ふ切は切を賞す  
切は切を切す切は切す切は切す切は切す



字は必ず仕まゝく濁るるの儘と云ふは三六指白  
ふして是又一縣の各自之次第連続の心算して  
ありきとてぬれとの相いらんもあらず是等れ  
と云ふり、先人の格好やと云ふかゝの字毎に其文  
字一句の内は場儀成りたるより止まるる  
さらの爰例にせよとて申はる上は返るるの  
はまゝと云ふ所申あれは古人の式申るに  
申之と云ふ心算のまゝ歎部指しあはるるの  
係阿りとも是を母の高直の料算も申  
も人老人の筆の人を申る毎を是人スハ

吾亦其意ひし所は時委曲は是を正し時ハ  
一度の直ももその初心の方ハけ道は儂く懈  
怠の甘楽ひなるハを離れん人合もし松より  
味かれら申も其も其も其も其も其も其も其も  
高直隠核意算のふ集なるを後の其れ人  
先輩の正し格好あはるるハ目を付は  
こまゝ千歳一時の爰は是を壽めは  
とて其意申す式と云ふ 然欲る其味の族ハ  
是も其意申すを後其れ人をまゝと云ふ  
海より其のけ道を好む其れ人の何れハ其白

廿八切字を入て附の季を庭中入こる此間答  
片のやうに付立懸ハ文字毎片月三ハてと知  
かあこく心得て欠徳立甫の定られ  
裡式をもりて付さる付一冊なると天下  
流舞止傳りるとも何れ非ざる者もあれハ  
あや一巻自尔葉異なる白作りのこもる  
有年之とも勢くす其知半片何れは是氏  
道北肝要を扱ふ

書林

大坂高麗橋筋壹丁目

吹田屋多四郎

付是くたるおく之神探し且  
か一書をも押く探さるる  
故人善向徳寺の房を御託の  
傳初子似通ひきりおは成平  
威一高松をいふ是也此書家  
那諸塔を組立る良材也



成るものをも自類平流に  
削つゝか多しの書肆止ふぬれ  
掲るい進棧にすり母に際  
述り贅具自昔申先歳を秋  
浪善深暮、塙正月堂誌之



通

卷之四

通

通

通